

ISBN 978-4-903875-23-1

Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series 20

ユーラシア諸言語の多様性と動態－20号記念号－

ユーラシア言語研究コンソーシアム 2018年3月発行

Diversity and Dynamics of Eurasian Languages: The 20th Commemorative Volume

The Consortium for the Studies of Eurasian Languages

サハ語とトゥバ語の受身と再帰

Passive and Reflexive Voices in Sakha (Yakut) and Tyvan

江畑冬生

EBATA, Fuyuki

## サハ語とトゥバ語の受身と再帰

江畑 冬生

キーワード： チュルク諸語， 対照言語学， ボイス， 非人称受動， 逆使役

### 1. はじめに

本論文では、チュルク諸語北東グループに属する2つの言語（サハ語とトゥバ語）の受身接辞と再帰接辞の用法を対照しながら記述する。同系の両言語における受身接辞と再帰接辞の用法を対照した結果、両言語のボイス接辞の用法には共通点が存在する一方で顕著な相違点もあることが明らかになった。

チュルク諸語には共通して、同根のボイス接辞（使役接辞・受身接辞・再帰接辞・相互共同接辞）が存在する [Johanson (1998: 42)]。これらはいずれも、動詞語幹に付加される派生接辞である。以降の議論のうち各ボイス接辞の記述に関する内容の一部は、筆者による一連の研究に基づく。すなわちサハ語の再帰・受身に関しては江畑 (2013) および江畑 (2016) に、トゥバ語の再帰に関しては江畑 (2018) による。また以下において出典の無い例は、筆者が行ったフィールドワークまたは筆者の作成したコーパスから得られたものである<sup>1</sup>。サハ語・トゥバ語の接尾辞は、母音調和や子音交替などによる異形態を持っている。従って以下で示す接尾辞の形態はあくまでも1つの代表形に過ぎないことに留意されたい。

### 2. サハ語の受身

サハ語の受身接辞の形態は *-ilin* である<sup>2</sup>。受身接辞は子音語幹動詞（語幹末に子音を持つ動詞）にしか付加しない。述語動詞に受身接辞が付加される場合、典型的な受身文だけでなく非人称受動文も形成される。

<sup>1</sup> 本研究は、科学研究費・若手研究(A)「北東ユーラシアチュルク系諸言語の研究：分岐と接触の歴史的過程の解明」の支援を受けたものである。筆者が言語研究を続けてこられたのは、多くの先生方が導いてくださったお陰である。本論文では特に、故庄垣内正弘先生に深謝を捧げます。2000年以降、サハ共和国およびトゥバ共和国における筆者のフィールドワークを助けて下さった多くの方々にも、感謝申し上げます。匿名査読者からの貴重なご指摘にも深く感謝いたします。

<sup>2</sup> 従来のサハ語研究では、受身接辞として *-n* および *-ilin* という2種の異形態を認めている。これに対し筆者は江畑 (2016) において、*-n* に関しては逆使役接辞（の異形態）であると見なすべきであると主張した（本論文もこの立場に従う）。語幹末に */y/* を持つ動詞の一部に受身接辞が付加する場合、例外的に */y/* が脱落し異形態 *-lin* が付加することがある： *suru-lun* 「書かれる」 (< *suruy* 「書く」)。

典型的な受身文には、(1)や(2)がある。Stachowski and Menz (1988: 432) などが指摘するように、受身文の動作主が明示される場合には具格が用いられる。

- (1) *aan ah-ilin-na*  
 ドア 開ける-PASS-PST:3SG  
 「ドアが開けられた」
- (2) *xallaan bilit-inan büri-llü-büt*  
 空 雲-INST 覆う-PASS-PST:3SG  
 「空が雲で覆われた」

ただし受身文の動作主は、常に明示できるわけではない。江畑 (2013) でも述べたように、受身文の動作主として特定人物が現れることはない。従って「私は弟に殴られた」や「この家は私の友人によって建てられた」などは非文となる。(3)のような不特定人物の場合に限り、具格名詞句による動作主明示が可能になる。

- (3) *žie-m saxa uus-tar-ü-nan tut-ullu-but*  
 家-POSS.1SG サハ 職人-PL-POSS.3SG-INST 建てる-PASS-PST:3SG  
 「私の家はサハの職人たちにより建てられた」

サハ語の受身文の大きな特徴として、非人称受動文が生産的に形成されることがある。サハ語の非人称受動文には、他動詞文をベースにするものと自動詞文をベースにするものがある<sup>3</sup>。

他動詞文からの非人称受動文には、次のようなものがある。いずれの例文でも動作対象は、対格名詞句のままで現れている（言い換えれば、それらは主語に「昇格」していない）。他動詞からの非人称受動文では、動作主が明示されることはない。

- (4) *turnir omus tögöl-ü-n üt-ilin-na*  
 杯 10 番目 回-POSS.3SG-ACC 送る-PASS-PST:3SG  
 「トーナメントの第 10 回が開催された」
- (5) *sonun-nar-ï aax-ilin-na*  
 ニュース-PL-ACC 読む-PASS-PST:3SG  
 「ニュースが読まれた」
- [Vinokurova (2005: 336)]

<sup>3</sup> Dixon (2010: 75) が指摘するように、多くの研究者が文 (sentence) と節 (clause) の厳密な使い分けを怠っている。本節の議論においても厳密には「受身節」「他動詞節」のような術語を用いるべきではあるが、慣例に従い「受身文」「他動詞文」などの術語を代わりに用いることにする。

自動詞からの非人称受動文には、次のようなものがある。自動詞からの非人称受動文でもやはり、動作主が明示されることはない。

- (6) *onnuk sir-ge meene kiir-illi-bet*  
 そんな 場所-DAT 不必要に 入る-PASS-NEG:PRS:3SG  
 「そのような場所には気安く入れない」
- (7) *massiina-nan ikki suukka-nan tiij-ill-er*  
 車-INST 2 昼夜-INST 到着する-PASS-PRS:3SG  
 「[そこには] 車で2昼夜で着く」

### 3. トゥバ語の受身

トゥバ語の受身接辞の形態は-(i)lである<sup>4</sup>。前節で見たように、サハ語の受身の1つの特徴は典型的受身文だけでなく非人称受動文を作れることであった。対照的にトゥバ語では、「受身接辞」の機能が逆接辞のみに限定されている<sup>5</sup>。従って受身接辞が付加された結果、(8)や(9)のような自動詞文を生む結果となる。

- (8) *karak čet-pes orgu xovu-nuŋ delgem-ner-i kös-t-ür*  
 目 届く-VN.NEG 平たい 原-GEN 広がり-PL-POSS.3 見る-PASS-3  
 「見渡せないほどの平原の広がりが見える」
- (9) *iyigi ka't-če lift=bile ködür-l-üp kel-di-vis*  
 第2の 階-DIR エレベーター =INST 上げる-PASS-CVB 来る-PST-1PL  
 「私たちは2階までエレベーターで上がった」

Dorzhu (2013: 121) では、受身文の動作主が与格または奪格で現れうると指摘している。たしかに(10)のような文では、動作主が奪格名詞句で現れているようにも見える。しかしながら(11)のように、トゥバ語では原因を表す名詞句一般に奪格標示がなされる。従って(10)の奪格名詞句 *xat-tan* 「風で」も、動作主ではなく原因だと見做すことが可能である。

<sup>4</sup> 母音始まりの接尾辞が後続する際、受身接辞中の母音が脱落し異形態-*t*が現れることがある。例えば *tiv-il* 「見つかる」にアオリストの接尾辞を付加すると *tip-t-ar* (発見する-PASS-AOR) となる。Letjagina and Nasilov (1974: 14) および Dorzhu (2013: 119) によれば、例外的に異形態-*til* が付加するものが3つある：*art-til* 「ぶらさがる」、*kut-til* 「注がれる」、*čat-til* 「広がる」。

<sup>5</sup> Isxakov and Pal'mbax (1961: 290) では、トゥバ語の受身接辞の用法が再帰接辞に類似していることを指摘している。先行研究の中で Dorzhu (2013) のみは、「受身態」ではなく「中動態」(медальный залог) の名称を用いている。大崎 (2006: 187) では、トゥバ語の受身接辞が「反使役法の用法に限って用いられるようである」とすでに指摘されている。

- (10) *soŋga sil-i xat-tan buz-ul-gan*  
 窓 ガラス-POSS.3 風-ABL 壊す-PASS-PST  
 「窓ガラスが風で割れた」 [Kuular (2007: 1173)]

- (11) *izig-den čer kurga-y ber-gen*  
 暑さ-ABL 土地 乾く-CVB AUX-PST  
 「暑さにより土地が乾燥した」 [高島 (2008: 62)]

Kuular (2007: 1172) は, (12)を受身文の例として挙げている (なお Isxakov and Pal'mbax (1961: 290) でも, ほぼ同様の例文が受身文の代表とされている). しかしながらこのような文に与格名詞句または奪格名詞句を加えたとしても, それは(13)のように場所を表す名詞句としか解釈されない. したがって本論文ではやはり, トゥハ語の受身接辞の用法は逆使役に限定されると結論付ける.

- (12) *čit-ken nom tip-t-ip kel-gen*  
 なくなる-VN.PST 本 見つける-PASS-CVB AUX-PST  
 「なくなった本が見つかった」

- (13) *čit-ken nom men-den tip-t-ip kel-gen*  
 なくなる-VN.PST 本 1SG-ABL 見つける-PASS-CVB AUX-PST  
 「なくなった本が私の所から見つかった」

#### 4. サハ語の再帰と逆使役

江畑 (2016) で, 他の先行研究とは異なり, サハ語において同音形式の再帰接辞(*ijn*) と逆使役接辞(*ijn*) の区別を形態素レベルで認める立場を取る. 本論文でもこの立場を踏襲する<sup>6</sup>.

再帰接辞は「自分 (の身体部位) を」を表す他, 「自分の所に」「自分のために」「自分用に」「自力で」などの幅広い意味をカバーする.

- (14) *sierkile-ŋe beje-bi-n kör-ün-e-bin*  
 鏡-DAT 自分-POSS.1SG-ACC 見る-REFL-PRS-1SG  
 「私は鏡で自分を見る」

<sup>6</sup> 江畑 (2016) でも示したように, 再帰接辞(*ijn*) と逆使役接辞(*ijn*) は見かけ上は同音形式のようであるが, 形態音韻交替・形態素配列・統語法および意味において明確な相違を示す. さらに語幹の形式においては同音形式だが異形態の現れ方において異なる再帰動詞と逆使役動詞のペアが, 少なくとも4つ存在する.

- (15) *arugui-mu kut-un-mu-m*  
 酒-ACC 注ぐ-REFL-PST-1SG  
 「私は酒を自分の杯に注いだ」
- (16) *iye-m mannik kepsee-bit-i-n suru-m-mut-um*  
 母-POSS.1SG このように 語る-VN.PST-3SG-ACC 書く-REFL-PST-1SG  
 「私は母がこのように言ったのを（自分のためのメモとして）書きとめた」
- (17) *et-te buhar-in-an miin-ne is*  
 肉-PART 調理する-REFL-CVB スープ-PART 飲む:IMP.2SG  
 「肉を自分で茹でて、スープを飲みなさい」

これに対し逆使役接辞が付加した場合には、派生の意味が比較的透明である。逆使役接辞が付加された結果、(18)や(19)のような自動詞文を生む結果となる。

- (18) *komp'juter internek-ke xolbo-n-no*  
 パソコン インターネット-DAT つなげる-ANTI-PST:3SG  
 「パソコンがインターネットにつながった」
- (19) *manna ütiüo as aha-m-makka tur-ar*  
 ここで 良い 食べ物 食べる-ANTI-NEG:CVB AUX-PRS:3SG  
 「この地方では良質の食料が食されていない」

## 5. トゥバ語の再帰

トゥバ語の再帰接辞の形態は-(i)n, -din, -(t)in の3つである。逆使役用法に限られている受身接辞とは対照的に、トゥバ語の再帰接辞は幅広い用法をカバーしている。Kuular (1987) などの先行研究ではこの多岐に渡る再帰の用法を様々に分類しているが、本論文では江畑 (2018) に従い、トゥバ語の再帰接辞の用法を再帰用法と逆使役用法の2つに大別する（ただしサハ語の場合とは異なり、形態素レベルの区別ではない）。

再帰用法には、中心的な意味と周辺的な意味が認められる。再帰用法の中心的な意味は、「自分（の身体部位）を」「自分のために」「自力で」「自らの身体部位を手段として」である。

- (20) *bod-u-n ču-n-up al-di*  
 自分-POSS.3SG-ACC 洗う-REFL-CVB AUX-PST  
 「彼(女)は自分（の体）を洗った」 [Isxakov and Pal'mbax 1961: 289]

- (21) *ol a't-ĩ tergele-n-di*  
 3SG 馬-ACC 馬車につなぐ-REFL-PST

「彼(女)は馬を馬車につないだ」

[Kuular (2007: 1173)]

- (22) *buruu-m min-n-ip =tur =men*  
 罪-POSS.1SG 分かる-REFL-CVB=AUX=1SG

「私は自分の罪を自覚している」

(20)や(21)のように、再帰用法では対格目的語を保持することが可能である。次の(23)および後で示す(26)や(27)のように、自動詞にも再帰接辞が付加しうる。つまり再帰用法では、項の増減を必ずしも伴うわけではない。

- (23) *bo xĩn kičeel-ivis-te sorulga-vĩs bol-dun-gan =be*  
 この 日 授業-POSS.1PL-LOC 目標-POSS.1PL なる-REFL-PST=Q

「今日、私たちの授業で目標は実現しましたか？」

再帰用法には2つの周辺の意味がある。1つを「対象欠如」と呼ぶ。この用法は意味的には他動詞的であるが、実際には対格目的語を欠く。(24)や(25)のように、動作対象への影響よりはむしろ、動作主の状況を描写することに主眼が置かれることにこの用法の特徴がある。

- (24) *agaar-ga nomču-ttun-ar-in-ga inak =men*  
 自然-DAT 読む-REFL-AOR-3-DAT 好き =1SG

「私は自然の中で読書をするのが好きだ」

- (25) *bo maygĩn-niij askĩ čöön čũk-če kör-n-ũp al-gan*  
 この テント-GEN 口 東 方-DIR 見る-REFL-CVB AUX-PST

「このテントの入り口は東の方を向いている」

もう1つの周辺の意味を「状況可能」と名付ける。(26)や(27)のように否定形で現れ、主語に意志はあるが外的要因により行為を遂行できない状況を表す場合が多い。

- (26) *kĩlašta-ttĩn-mas*  
 歩く-REFL-NEG:AOR

「[大雨で道路が冠水して] 歩けない」

- (27) *udu-ur*      *de-er-ge*      *udu-ttun-mas*  
 眠る-AOR      言う-AOR-DAT      眠る-REFL-NEG:AOR  
 「眠ろうとする時に眠れない」

再帰用法が幅広い意味をカバーし意味的予測が困難であるのに対し、逆使役用法の意味は予測が容易である。すなわち元の動詞を含む節を「XがYをVする」と定式化したならば、再帰動詞を含む節は「YがV(REFL)する」のように示せる。

- (28) *bo*      *nom*      *eki*      *sat-tin-ip=tur*  
 この      本      良く      売る-REFL-CVB=AUX  
 「この本は良く売れている」

- (29) *sadig*      *kažan*      *ažit-tin-ar-il*  
 店      いつ      あける-REFL-AOR:3-WHQ  
 「店はいつあく？」

第3節でも見たように、トゥバ語の受身接辞は逆使役用法を持つ。つまりトゥバ語の逆使役には、受身接辞と再帰接辞の両方が用いられうることになる。ただし再帰接辞の逆使役用法では無意志動詞のみを派生するのに対し、受身接辞では(9)における *ködür-ül* 「上がる、登る」のような意志動詞を派生することがある<sup>7</sup>。従って両接辞の用法は部分的には重なっているものの、相違点も存在している。

## 6. まとめ

本論文は、同系のチュルク諸語に属し、かつ同じ北東グループに分類されるサハ語とトゥバ語の受身接辞と再帰接辞の用法を対照した。ユーラシア大陸の東西に広がる30余のチュルク諸語の中で、両言語は系統的・地理的に比較的近いと言える。しかし両言語の受身接辞と再帰接辞の用法には、顕著な違いも見られた。本論文の主な結論は以下の通りである。

- [1] サハ語の受身接辞は、典型的受身文に加えて、自動詞・他動詞からの非人称受動文を形成する用法も見られるなど広い用法を持つ。対照的にトゥバ語の受身接辞の用法は、逆使役に限られている。
- [2] サハ語では、同音形式の接辞として再帰接辞(*-in*)と逆使役接辞(*-in*)が形態素レベルで区別される。トゥバ語の再帰接辞(*-in*)にも再帰用法と逆使役用法が認められるが、あくまで用法レベルの区別である。両言語に共通して、再帰接辞が幅広い意味領域を

<sup>7</sup> ただし受身接辞が意志動詞(としての用法を持つ動詞)を派生することは稀である。現段階の筆者の調査の限りでは、他に *m-ül* 「現れる」、*čar-ül* 「別れる」および *čir-ül* 「集まる」しか見つかっていない。



カバーしている。トゥバ語の再帰接辞には「対象欠如」および「状況可能」という周辺の用法も見られるため、サハ語よりも用法が広がっていると言える。

[3] トゥバ語では、受身接辞と再帰接辞の両方とも逆使役に用いられる。ただし意志動詞を派生することが可能なのは、受身接辞のみである。

サハ語とトゥバ語の受身接辞・再帰接辞・逆使役接辞の用法は、以下の表のようにまとめることができる。

[表] サハ語とトゥバ語の受身接辞・再帰接辞・逆使役接辞の用法

	非人称受身	典型受身	逆使役	再帰	対象欠如	状況可能
サハ語	PASS	PASS	ANTI	REFL	---	---
トゥバ語	---	---	PASS/REFL	REFL	REFL	REFL

なお両言語において、使役接辞が受身の意味で用いられることがある（サハ語については江畑 (2013) を参照）。使役接辞の用法も含めたボイス体系全体の議論については、今後の課題としたい。

## 略号

ABL 奪格, ACC 対格, ANTI 逆使役, AOR アオリスト, AUX 補助動詞, CVB 副動詞, DAT 与格, DIR 向格, GEN 属格, IMP 命令法, INST 具格, LOC 処格, NEG 否定, PART 分格, PASS 受身, PL 複数, POSS 所有接辞, PRS 現在, PST 過去, Q 疑問, REFL 再帰, SG 単数, VBLZ 動詞派生, VN 形動詞, WHQ 疑問詞疑問

## 参考文献

- Dixon, R.M.W. (2010) *Basic linguistic theory vol.1*. Oxford: Oxford University Press.
- Dorzhu, K.B. (2013) *Kategoriya zaloga v tuvinskom jazyke*. Kyzyl: Tuvinskiy Gosudarstvennyj Universitet.
- Isxakov, F.G. and A.A. Pal'mbax. (1961) *Grammatika tuvinskogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Moskva: Vostočnoj Literatry.
- Johanson, Lars. (1998) The structure of Turkic. Lars Johanson and Éva Ágnes Csató. (eds.) *The Turkic languages*. 30-66. London: Routledge.
- Kuular, K.B. (1986) Vozvratnyj zalog v tuvinskom jazyke. *Issledovanija po tuvinskoj filologii*. 33-52. Kyzyl: Tuvinskij naučno-issledovatel'skij institut jazyka, literatury i istorii.
- Kuular, Klara B. (2007) Reciprocals, sociatives, comitatives, and assistives in Tuvan. V.P. Nedjalkov. (ed.) *Typology of reciprocal constructions*. 1163-1229. Amsterdam: John Benjamins.
- Letjagina, N.I. and D.M. Nasilov. (1974) Passiv v tuvinskom jazyke. *Sovetskaja tjurkologija*. vol.4,

13-24.

Stachowski, Marek and Astrid Menz. (1998) Yakut. Johanson, Lars and Éva Ágnes Csató. (eds.) *The Turkic languages*. 417-433. London: Routledge.

Vinokurova, Nadezhda. (2005) *Lexical categories and argument structure. A study with reference to Sakha*. Utrecht: LOT.

江畑 冬生 (2013) 「サハ語の使役文と受動文 —二重対格使役文と非人称受動文を中心に—」 『北方人文研究』 第6号, 65-81.

江畑 冬生 (2016) 「サハ語の再帰接辞・逆使役接辞・受身接辞」 『北方言語研究』 第6号, 43-52.

江畑 冬生 (2018) 「トゥバ語の再帰」 『北方言語研究』 第8号, 81-89.

大崎 紀子 (2006) 『チュルク語・モンゴル語の使役と受動の研究 —キルギス語と中期モンゴル語を中心として—』 京都大学博士論文.

高島 尚生 (2008) 『基礎トゥヴァ語文法』 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所.

## Passive and Reflexive Voices in Sakha (Yakut) and Tyvan

Fuyuki EBATA

ebata@human.niigata-u.ac.jp

**Keywords:** Turkic Languages, Contrastive Linguistics, Voice, Impersonal Passive, Anticausative

This paper examines passive and reflexive voices in the Turkic languages of Sakha and Tyvan, and conducts a contrastive analysis of the use of the voice suffixes between the two languages. Although the passive and reflexive suffixes of Sakha and Tyvan are cognate and similar in form, there are considerable differences in use. While Sakha Passive allows not only typical passive but also impersonal passive constructions, the only function of Tyvan Passive is anticausative. Sakha distinguishes two voice suffixes, the reflexive suffix *-(i)n* and the anticausative suffix *-(i)n*, in the morpheme level. The Tyvan reflexive suffix *-(i)n* has a wider range of use, reflexive and anticausative as well as patientless and possibility uses. In Tyvan, both the reflexive and passive suffixes can be anticausative; however only the passive suffix can derive a volitional verb.